

救濟の論理

久松 眞一

救濟といふことが可能であるならばその可能である理由がなければならぬ。救濟といふことを Folge とするならばその Folge に對する Grund がなければならぬ。この救濟の Grund を明かにすることを私はこゝで救濟の論理といつておきたいのである。私がこゝに論理といふ語を使用するのはこの救濟の Grund を明かにすることを救濟可能の因果律的理由を明かにすることから嚴密に區別したいがためである。因果律的理由といふのは、たとへば、アダム以來人類が相續し來れる原罪の贖はれたのはイエスが十字架上で死んだがためであるとするがごときである。この場合にイエス十字架上の死といふことゝ贖罪といふことゝの間に因果關係が完全に成立つにしても、それは單に因果關係であるから、それによつてはイエス十字架上の死といふことゝ贖罪といふことゝが内面的、必然的に結びついてゐるかゝるないかを明かにすることはできぬ。何とならばイエス十字架上の死といふことゝ贖罪とい

ふことゝの間に因果關係が成立するためには、イエス十字架上の死といふ一つの經驗的事實から贖罪といふ他の經驗的事實が生起したといふことが經驗的に證明せられさへすればよいのであつてその生起が必然的であらうが、偶然的であらうがそれは沒交渉であるからである。即ちイエス十字架上の死が贖罪といふことを必然的に生起しやうが、偶然的に生起しやうが生起しさへすれば因果關係は完全に成立つのである。それは因果律といふものが元來經驗法則であるがためであるが、因果律がかやうなものであるならば、贖罪といふことの因果的理由、即ち、原因がイエス十字架上の死であるといふことが完全に證明されたにしても、それによつて贖罪可能の理由が明かにせられたとはいへない。何とならば、因果關係に於ては原因と結果とが必然的に結びついて居るか、偶然的に結びついて居るかを確定することはできないのであるから、イエス十字架上の死といふことから必然的に贖罪といふことが生起すると定言することはできない。随つてイエス十字架上の死といふことから今後贖罪といふことが生起せない場合があるかも知れない。或は更に進んでイエス十字架上の死と贖罪とが全く無關係のものになつてしまふかも知れない。然らば贖罪といふこの可能の理由を單に因果關係によつて求めるのは無意味なことであ

る。それ故もしも贖罪可能の理由がイエス十字架上の死であるといふことを主張しやうとするならば、イエス十字架上の死と、贖罪との間の内面的必然的關係を明かにせねばならぬ。この必然的關係は單なる事實的關係ではなくして、事實的關係の根柢となる關係である。これが *Grund* 及 *folge* との關係である。この關係はイエス十字架上の死をして原罪を贖はしめた理由である。この關係が確立せられてはじめて贖罪の *Grund* はイエス十字架上の死であるといふ事ができるのである。普通宗教の實行的方向即ち信仰といふやうな方面からは贖罪はイエス十字架上の死によつて成立つたといふ因果關係をば只單にそのまゝに信すればよいかも知れない。否、それが宗教の宗教たるどころ、信仰の信仰たるどころであるかも知れない。佛教の淨土教などに於ても彌陀永劫の修行が一切衆生無始以來の罪を贖ひつくしたことをそのまゝ信せんことを要求する。もとより私どもはこの宗教的信仰によつてイエスもしくは彌陀の恵に浴することができてもあらう。然しながらその恵に浴することができるといふためにはまづ恵或は贖罪といふことが、それを私どもが知るにしても知らぬにしても、確實に完成されて居らなければならぬ。もし然らざれば贖罪は何の基礎をもたぬ荒唐のことになつてしまつて、信する價值もなければ、信せ

させる價值もないものになつてしまふであらう。よしんば又信仰によつて恵に浴することができたにしてもそれは單に偶然的なことになつてしまふであらう。それであるから私どもが贖罪を信するにしても信せないにしても主觀的信仰にかゝはらず、贖罪が完成されて居らなかつたならば、贖罪を信するといふやうなことも何の根柢もなき盲信と何等擇ぶどころなきに至るであらう。随つてたとひその盲信によつて神の恵に浴したと思つて居つてもそれは主觀的の氣休めで一時的の *illusion* であるかも知れぬ。贖罪の信仰がもしかやうな虚妄な主觀的の氣休めであるならば、イエス十字架上の死も彌陀永劫の修行もそのこと自身は贖罪と何の關係もなき單に虚妄なる方便上の假設に墮してしまつて贖罪に關するそのこと自身の内在的價值は失はれてしまふであらう。かくて贖罪といふやうなことも實用主義的のものになつてしまふのである。それ故贖罪の信仰が正信であるためにはイエス十字架上の死もしくは、彌陀永劫の修行が眞に一切の罪を贖つたといふことが確證されねばならぬ。それが確證さるゝには何故にイエス十字架上の死もしくは、彌陀永劫の修行が一切の罪を贖ふことができたかを明かにせなければならぬ。贖罪の因果關係ではなくして *Grund & Folge* の關係が明かにせられねばならぬ。即ち贖罪の論

理がなければならぬ。

これまで私はクリスト教、もしくは浄土教の贖罪といふ特殊なる救済について救済の論理といふ意味を考へて見たのであるが、救済一般についてもこれと一般である。救済は理智を越えたる體驗であつて、私どもの理智をもつては説明のできないことであるかも知れない。然しながら救済といふ體驗が成立するに何の理由もなしに成立するとは考へられない。何かそこに理由がなければならぬ。その理由といふのは救済といふ體驗の根柢となるもの、即ち救済といふ體驗がそれによつて可能なるものである。約言すれば救済の可能性の原理である。この可能性の原理を明かにするといふことは救済を論理的に基礎づけるといふことである。論理的に基礎づけるといふと、恰も私どもが自分の理智によつて救済の基礎を築き上げる如くであるけれども、さういふことではなくして、自分の理智の一指だもふるゝことを許さぬ理智を越えたる先驗的條件を明かにすることである。かやうな先驗的條件が明かになつてはじめて救済の普遍妥當性が樹立せらるゝのである。この救済の普遍妥當性を樹立するといふことは宗教哲學が救済を取扱ふ場合の最も重要な役目といはねばならぬ。救済をば一つの體驗もしくは直觀としてそのまゝに見救

濟可能の理由をば不可思議なる奇蹟とするのは宗教哲學としても徹底したる態度とはいはれないのみならず宗教としても根柢の薄弱なるものといはねばならぬ。それ故基礎の鞏固なる宗教にあつては經驗的方向に止らず超經驗的方面を具備して居る。こゝにいふ超經驗的方面とは神秘もしくは奇蹟を指すのではなくして經驗的方面をして可能ならしむる Grund を指すのである。佛教などに於て理と事とを立て理を以て事の根柢となす如きは經驗的方面をば超經驗的によつて基礎づけてんとするものであると見ることが出来る。經驗的は一時的、特殊のであり、超經驗的は永久的、普遍的である。宗教の眞髓は超經驗的にある。經驗的はこの超經驗的の表現にある。體驗といふ事は經驗的が超經驗的を経験する場合の經驗である。宗教的體驗とは超經驗的、即ち理を認得することである。それ故もしも吾々が宗教の經驗的方面を基礎づける事を以て宗教哲學の任務とするならば、その宗教哲學は宗教の根柢になるものであるといはねばならぬ。ヘーゲルが哲學を宗教の根柢に置いたのはかゝる理由によるものではなからうか。然しながら私どもはヘーゲルの所謂宗教のみを宗教と認めねばならぬ理由を持たぬ。却つてヘーゲルの所謂哲學を以て宗教の眞髓と考へたいのである。それはさういふ哲學は宗教的經驗を基礎

づける原理の體系であるからである。かゝる意味の哲學がなかつたならば宗教の普遍性、妥當性は樹立さるゝことはできない。随つて宗教の眞理性も主張されぬことになる。普通宗教に關して體驗といふこともしくは信仰といふことを高調し過ぎる人は宗教といふものを單に經驗と超經驗的との間の經驗的關係のみに限るのである。しかし經驗的關係は超經驗的原理によつてはじめて可能であるから宗教から超經驗的原理をはなして考ふべきものではない。それは宗教に取つては最も重要な役目をなすものである。一切の宗教的經驗はこの超經驗的原理に基いて起るのであるからこれがなかつたならば宗教的經驗は起らぬ筈のものである。それであるから宗教哲學としても、宗教としても超經驗的原理を明かにするといふことは重要なことゝいはねばならぬ。

私は上來救濟の論理といふことがいかなる意味であるか、又それがいかに重要なことであるかをのべて來たつもりであるが、然らば救濟の論理はいかやうに發展せらるゝであらうか、これよりそれを考へて見ようと思ふ。それに付て私はまづ救濟といふことはいかなることであるかといふことを考へて見なければならぬ。救濟の可能性を樹立するにはまづ救濟の意味を定めなければならぬからである。私

のこゝに謂ふ救濟の意味といふのは救濟といふ多くの經驗的事實より歸納抽象したる意味ではなくして、救濟といふことはいかなることでもなければならぬかといふ價値的意味である。即ち、救濟の理想である。渴したる時に水を與へられ、病みたる時に藥を惠まれて、渴を癒し、病を治したやうな場合にも私どもは通常救濟されたといつて居る。かゝる場合の救濟は人間の現實的要求の満足といふことである。かゝる救濟のために人間の日常生活の殆んど全部が費やされ、又この救濟の要求によつて文化的事業が營まれて居るのである。而してこの救濟の完成に向つて努力しつゝあるのである。然しながらこの救濟は何時完成さるゝであらうか。人間の現實的要求が無限である限り、この救濟の完成も無限に遠い未來といはねばならぬ。これによつて見ればたとひ人間のあらゆる現實的要求が一一満足されたにしても現實的要求が存在する限り救濟は決して完成さるゝことがないのである。まして現實的要求が一一満足されるといふことに對しては何の確實なる根據もない、隨つてかゝる救濟の普遍性は立證されない。のみならず人間には無限に多くの制約があつて人間の無限に多くの現實的要求の満足をば妨げて居るのである。そこで人間の現實的要求の無限自由性と人間の有限性との間に矛盾撞着を生ずるのは當然

なことである。この矛盾撞着は更に現實的救濟の絶對性普遍性を反證するものである。(未完)